

令和5年度第2回高知県農業経営・生産対策等に関する第三者委員会議事概要

- 1 開催日時 令和6年2月1日(木) 14:00~16:00
開催場所 四万十町役場東庁舎2階 多目的小ホール
出席者 委員3名(玉里委員長、松島委員、宮地委員)
- 2 議事内容 中山間地域等直接支払制度の最終評価
- 3 議事概要 ※■委員の質問・意見 □事務局の回答

■集落戦略の話し合いに用いる地図とはどのようなものか。様式等が定められているのか。

□様式はないが、ほとんどの協定では、市町村が保有している航空写真に集落戦略の記載内容を筆ごとに地図に落とし込んで作成されている。例えば、10年後も自分でやる、又は後継者が決まっている、というような農用地は青色に、現在は後継者等がないが、もしやってくれる方がいれば維持してもらいたい、というような農用地は黄色に塗るなど。

■作られた地図はどのように活用されているのか。地図を作ったら集落に戻し、そこから後継者への声かけなどにつながっているのか。

□地図は、まず集落協定で話し合い等して作成し、それを市町村に提出する、という流れになっている。集落戦略もそうだが、一旦作ったらそれで終わりというようなものではなく、状況は毎年変わっているので、それにあわせて更新されていくもの。ただ、区切りとして最終年度までに成案として一旦は市町村に提出されている、というところ。

また現在、各市町村では地域計画として、集落協定のない地域においても今後の農地活用等についての計画策定が進められているが、集落協定のある地域ではベースとして使用することになる。

■日本型直接支払は昔からあり、航空写真に、所有者や転用規制等を落とし込む、というようなことをずっとやっているのか、地域計画の作成にあたっては、先行している日本型直接支払のものを流用しているという状況か。

□中山間地域等直接支払で作成している集落戦略は地域計画に近い内容となっているため、これをベースとして地域計画が作られていく、ということでおっしゃるとおり。集落戦略を作成しているものの地域の全ての農地が集落協定に入っていない、という地域では、集落戦略をベースとして、全ての農地を包括する地域計画を作成することになる。

■戦略や地図を作成することで現状を見える化する、という利点はあると思うが、その後、農地の賃貸借が進むだとか、Uターンにつながるだとか、戦略を活用して、その後どのようにつながっていくかなどの見通しはあるか。

□国の政策上、今後は優良農地として残していくべきもの、担い手に集積していくものなど、ある程度は取捨選択していく必要があるが、そうした話し合いを地域の皆さんにさせていただくためのベースになっていくんだろうと考えている。

■香美市の自分の地区でも集落戦略を作成していたが、その後どうなったかわからない。

□農地として守っていくところ、後継者がいないので担い手に集積していくところ、林地化していくところなどについて、集落全体で話し合うこと、そしてそれを地区全体にフィードバックして共通認識として共有することが重要。その後どうなったかわからない、となると作成することが目的となってしまう恐れがある。

集落で、ここは後継者がいないので次の担い手等を探す必要がある、など話し合ってもらうことが一番の目的であり、地域計画も同様にやっているのか、その意識を持ってやっていただけるよう進め

ていく。

■市町村では農業委員会が主な担当になってやっていると思うが、香美市は広いこともあり、その事務量が多すぎるためかもしれない。

□香美市は集落協定の数も多い。現在は地域計画も作成しており、香美市全体の調整等行っていると数が多いので大変なのは事実。

■今回作成する地図の中に、土地の所有者と、そこが集落協定に参加しているかどうかまでは地図に落とし込んでいると思うが、その土地の将来の担い手まで落とし込んでいるか。

□筆ごとに管理者の名前と紐付けをしているので、現在の管理者がそのまま継続する場合や、既に後継者が決まっている場合は地図に落とし込むことができているが、そうでない農用地は、そこまでできていない。

■現在問題になってきているのは、担い手の広域化が進んでいることと、地域計画の単位とをバラバラのままにしておくか、ということ。

中山間地域は特にその傾向が強く、例えば大豊町ではゆとりファームが広域的に活動しており、ゆとりファームと集落営農と、さらに個別の集落の中の任意団体とが混在して活動している状態。

各集落単位の地域計画と、担い手の営農計画などをどのように調整していくか。

現在は、資源利用や土地の調整等のややこしいところを集落が行い、作業を広域の担い手が行い、事務を行政等のできるところがやっている、というのが高知県の状況ではないか、という印象。

■このアンケートは国に与えられた文言の中から選んでいるので、②-1では統合ではない選択肢を選んでいるが、本当にこれで良いのか、と思う。②-2も参加農家数の最小単位が2戸で本当にこれでいいのか。

■水利や農道の整備・維持などの資源利用調整などは昔から集落単位で行われているので、それを基本にするのはいいんだろうが、それもいつまでできるかわからない。

■その辺りも含め、積極的に変化を求めていくことが必要だろうと思うが、このアンケートの選択肢が現状維持のようになっているので、そこが高くなってしまっている。少し問題かなとも思うが、アンケートがこのような形なので仕方ない。

■第5期産業振興計画の展開図では柱5が中央に来ているが、これを3次元で表すのであれば、裏から全てにかかっている、というのが本当のイメージではないか。

□第4期では、全てを下支えする、という意味合いで下部に記載していた。今年度は第4期の最終年度ということで、各地域地域で農業者や農業団体に話を聞いてまわったところ、特に中山間地域では不整形な圃場や小さな圃場ではなかなか後継者も育ちにくいので、圃場整備が大事だ、という声を多く聞いたことが一つの契機となっている。きれいな農地を確保すれば新しい人も入るのではないか、ということで、これを中心に据えているもの。

■中山間地域は農業だけで活性化するわけではなく、林業や土木作業などもあるので、産業別ではなく、それらをつないだ中山間地域振興という観点から広く見たものもあっても良いのではないか。それとも既にあるのか。

□令和5年度中に高知県中山間地域再興ビジョンを策定予定であり、12月に素案を公表したところ。

■農業高校の入学者数が掲載されているが、入学者は200人程度だったように思う。どういうことか。

□農業総合科と畜産総合科の2学科のみの数字となっている。

■そういったことはきちんと書いておく必要があるのではないか。

■「農業の仕事内容が知られていない」ということで知ってもらうための取組が掲載されているが、もっと教育委員会と連携して取り組んだ方がよい。

- 高知県社会福祉協議会が「ナツボラ」(夏のボランティア体験キャンペーン)という名前で、県内のボランティア募集を冊子にとりまとめて紹介する取組を行っている。高校生や大学生の中での知名度も上がってきているので、農業分野も掲載してもらってみたい。大学が総合型選抜という選考を行っており、そこでは勉強だけではなく、どのような体験したか、ということも問われる。
- 職業体験をやることで、家が農家をやっているような子供であれば、自分もやってみようかな、とつながる可能性もあるのではないかな。そうして担い手が1人でも2人でも増えれば。
- 「総合的な学習の時間」については、学校側も何をやるか困っている、という面もあると思うので、身近に若手の農家がいるような学校であれば、取り入れてくれるかもしれない。そうした学校ができれば、それに乗っかってくるケースもあると思うので、ぜひモデル校をいくつか作ってやっていただければいいなと思う。
- 小学校や保育園での農業体験は多いが、その時点だと忘れてしまい就農につながらないので、中学校や高校生辺りでぜひやってもらいたい。
- 来年度は中学生の農業体験の取組も加えている。知ってもらえることが農業に興味を持ってもらう第一歩だと思うので、取り組んでいきたい。

- 女性の体験ツアーをするなら、女性の農業者の意見を聞いてやらないと中々参加してもらえないだろう。
- 女性の働きやすい環境整備は本当に大事だと思う。もっと魅力を発信できればいいなと思う。
- 今さらと言われるかもしれないが、人口減少の危機感が強くなっており、若者、特に女性の就業者を増やすため、全庁を挙げて取り組んでいる。本日ご紹介した取組は主に来年度の取組だが、一過性のものでなく、長期的に取り組むことが必要と考えているので、今後もご意見をいただきながら、引き続き取り組んでいきたい。

- 経営体も考えを変えなければならない。給料や週2日の休みをきちんと与え、労働力が足りないのであれば外国人技能実習生も雇う。それができるだけ経営規模にする、家族経営であっても、家族労働だけでやるのではなく、感覚のバージョンアップが必要。